人と人をつなぐ媒体としての街や建築の空間デザインとは

街に住う人々が玄関先で会話をし、散歩する子どもたちが店先や庭先で遊び、訪れた人たちが街並みを眺める。建築の中では、親子が対面キッチンをはさんで丁度良い距離感でくつろぐ。これらからは、街や建築の空間デザインが持つ人と人をつなぐ媒体としての働きを読み取ることができます。

これまで一貫して、人々の共用・交流空間、即ち都市空間における「街路空間」、建築空間における「コモンスペース」を研究対象とし、人々の「身体・心理・行動」の分析から空間計画を検証し、実際の設計に活かすことを目指してきました。

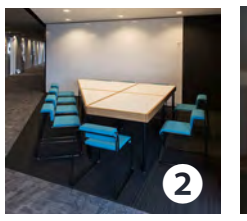
1998 年に東京電機大学の船越徹研究室において、研究のメインフィールドを街路空間とし、心理的評価と物理的指標の相関関係を主とした空間研究を行いました。これは、今なお建築・街空間を心理学の視点から定量的に分析する有効な手法です。次いで、東京大学の西出和彦研究室において、定量的心理学を離れ、当時心理学分野で注目されつつあった質的心理学を建築・街空間研究に導入することを目指しました。ナラティブや空間の持つ物語性を研究する「意味の心理学」とも呼ばれるものです。

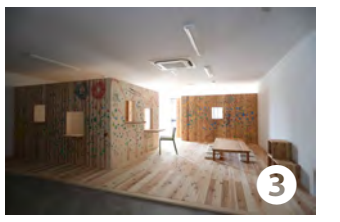
その後、上記の研究手法に加えて、行動分析を主な手法として、設計実践に資する知見や、実際の設計の検証を行う研究を展開してきました。街路、大学キャンパス、児童館や子連れコワーキングスペースなど対象は多岐に渡ります。

研究と実践のスパイラル

研究成果を設計実践に活かし、竣工後に検証する。ある建築の検証結果を次の設計の知見とする。建築や街は、実際に人に使われる時点で社会に対して働き、効果を発揮します。したがって何より創造的設計が重要であり、新しい切り口で社会を捉える創造的研究が重要であると考えています。

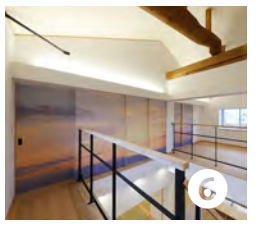
1


2


3

4

5


6

主として査読付論文（日本建築学会計画系文集ほか）を執筆した研究テーマを記載。
（共）は共同研究者であることを示し、その他は研究代表者。

定量的手法による空間学の実践から、新しい分析手法の導入へ

集落や街道の街並みは魅力的である。建築は集合することで、建築単体では創り得ない価値をうみだす・・・

ー建築集合体研究の系譜ー

1998

街並みの「ゆらぎ」の研究（共）

歴史的街路景観には統一感のなかにも多様性を備えた独特の魅力がある。全国の伝統的建造物保存地区をまわり、街並み画像を用いた物理量分析（各種エレメントのゆらぎ度）と心理量分析（印象評価）の相関を探った。

＞＞＞東京電機大学船越研・積田研が確立してきた、SD 法による心理実験と物理量分析の相関分析など、空間研究の定量的分析手法を導入。

原宿における建築集合体の研究

「ゆらぎ」の前提は、その建築群が「集合」として認知されることにある。
歴史的街路ではなく、現代の都市において、それがいかに可能なのか。
現代都市における集合体認知の構造、日本らしさ・東京らしさ・原宿らしさの階層性および印象評価の構造が明らかになった。

グーグルストリートビューの活用による商店ファサードの分析

建築のファサードは、建築の内部の人と外を歩く人をつなぐインターフェイスである。都心部の街並みは様々な商店のファサードの並びで形成されていが、一見多様で乱雑に見えても、店舗の業種別に見るとある共通性が読み取れる。「その業種らしさ」とはどの様な特徴を持つのか。

＞＞＞ストリートビューという新しいツールを用いて都市空間を分析。

大学キャンパスにおける建築集合体の研究

規模や用途の規制と市場原理や施主の好みに委ねられた様な現代的都市形態の中で、大学キャンパスは、理性的な計画の視点が色濃く反映し、かつ長期的に変容を重ねている。
大学キャンパスの建築群が如何に集合体として認知され、キャンパスごとにどの様な特性を持つのか。コンピューターによる複雑ネットワーク分析の手法を用いて、その構造を解析した。
現代都市において、無秩序に建築を増減させていく中で如何に集合としての価値を高める事が可能なのか。その問いへの伏線である。 1

＞＞＞インターネット空間の分析に用いられる複雑ネットワーク分析の、建築集合体研究への導入。

2020

定量的心理学による空間学から、質的心理学による空間学へ

個々人にとっての建築や建築群の意味は形態論や定量的手法では捉えられない。意味の心理学への着目・・・

ー住環境の意味論の系譜ー

2002

意味の構成からみた三軒協定の研究

街に住う個々人にとって住環境としての街並みはどの様な意味を持つのか。現代において、意味の豊かな街並みはいかに形成しうるのか。専門家のデザインでも、リーダー主導のまちづくり活動でもない、個人から始まるボトムアップの「意味の豊かな街並み」の方法論を探る。

＞＞＞心理実験や定量的手法を離れ、「語り（ナラティブ）」分析の手法による、意味の心理学へ。

アニメ作品におけるロッキングチェアの意味

「物語」を持つ環境の意味は豊かになる。その物語が個人的なものであっても、広く共有されたものであっても。
一脚の椅子を主人公としたアニメ作品から、家具がその周囲の人や行動との関わりから持つ意味の多層的構造（多義性）を分析した。
環境の意味を、それに関わる主体や行動との関係から捉える手法を確立。

空気感をインタラクティブに共有する家具

テーブルは様々な作業・食事などに用いられるが、会話・会議など人々のコミュニケーションを媒介する装置でもある。この机上の空間をカメラとプロジェクターによる簡易なシステムで遠隔地とつなぐことで、テーブルの意味の拡張を試みた。

＞＞＞心理・行動分析をもとにしたデザインアイデアもとにプロトタイピングを繰り返し社会実装を目指す手法への取組み。 2

経験的側面から見る場所への愛着の形成の研究

主観的な環境の意味と、場所への愛着という概念は深く関わる。場所への愛着は、その場所そのものの特質や、その環境的特徴だけでは説明できない。むしろその個人のその場での経験という側面に大きく依存する。
人が場所への愛着を語る時、現在における好き嫌いや良い悪いといった評価と異なる部分、過去の経験の影響を受けた記憶がその対象となる。

＞＞＞場所への愛着を生み出す環境デザインの研究および設計を継続。

街での子どもの行動分析から、子連れの空間学へ

意味の豊かな街並みにおいて子どもが重要な役割を果たしている。街を歩く子どもたちは街を耕している・・・

ー子ども・子連れの空間論の系譜ー

2009

保育園児の散歩行動と街路環境の研究

住環境の意味論の視点で見ると、保育園児は、昼間の街の重要なアクターであった。行動観察によって、街路空間の特徴と散歩中の子どもの行動の関係を探った。街の重要な評価軸として、子どもと街が関わり、子どもがのびのびと散歩できるという視点の提言。

子連れ利用可能なコワークスペースの研究

子育てと仕事の両立には大きな困難を伴う現代社会。働くほど子どもと過ごせず、働かないと子どもを預けられない。ワンオペによる密室育児の問題も。家で育児、預けて働く以外の第三の道としての「子連れワーク」の可能性と、そのための空間に何が求められるか。 3

＞＞＞行動分析の手法を用いて、子どもと親を一つの主体とした捉えた「子連れの空間研究」を開拓。社会課題解決へ向けた社会実装を行った。

環境行動調査にもとづく児童館の研究

子連れ利用のある代表的施設としての児童館。しかしこの児童館の施設計画研究は十分な成果が存在しなかった。
統計的な利用状況調査および、子どもおよび親の行動分析による、児童館の空間設計に向けた研究。 4

＞＞＞児童館の研究成果を活用し、児童館を主たる機能とした多世代交流施設を実施設計など、研究と設計を継続。

ストック・マネジメント研究から、建築コミッショニングへ

行動分析の手法を建築コミッショニングに活かせないか・・・

ー建築マネジメント研究の系譜ー

2011

大学施設の共用空間における交流行動の研究

廊下やコモンスペースなどにおける平面計画と、研究者の行動の関係を明らかにすべく、定点観察による行動分析を行った。以降、大学施設におけるコミッショニングやテリトリー分析等にも研究展開した。 5

高蔵寺ニュータウンにおける施設立地およびストック再生に関する研究（共）

高齢化が進み空き家が増える高蔵寺ニュータウンにおいて、ワンセンター方式の抱える課題を探った。用途転用を見据えたストック活用によって今後の再生に向けた検討を実施。
実際に UR の空室再生のプロジェクトも実施した。

アクティビティとキャパシティに着目した公共施設マネジメントの研究（共）

人口構成やライフスタイルの変化等を背景とした各種公共施設の縮小・再編を見据え、市民の生活を構成する各種アクティビティと、既存ストックのキャパシティという基礎的データに着目して、再生・転用の可能性について検討した。

コミッショニングの大学施設での実践と分析

トータルビルコミッショニングを日本で初めて本格導入した大学施設の企画から運用プロセスを通じて、これまで設備中心だったコミッショニングに建築計画学の視点からの検証を導入。その成果を分析した。

＞＞＞昭和期に建てられた続き間型日本家屋のストック活用研究および実施設計など、研究と設計を継続。 6